

トップは語る

積み重ねた技術力を基軸に時代のニーズを捉える

関東支部

水澤化学工業株式会社 代表取締役社長

澤田 宏 氏



石油精製の触媒や吸着剤などに欠かせない中間原料である活性白土。その活性白土の製造で国内トップシェアを誇り、国際的にもトップ3の中に位置する水澤化学工業株式会社は、高い技術力をもつ企業として業界内での信頼も厚い。設立以来75年以上の歴史をもつ同社は、2011年に就任した澤田社長のもと、主力製品である活性白土に軸をおきながらも、数々の無機材料が持つ可能性を製品に活かすための研究開発にも取り組んでいる。また、取締役 管理室長の丹呉長之輔氏が関東支部支部長を務めるなど、FUJITSUファミリー会の活動も支えている。

さわだひろし / 1954年生。鶴岡工業高等専門学校卒業。1975年水澤化学工業株式会社入社、研究開発部門に在籍し数々の研究に従事。その後、水沢工場（山形県鶴岡市）と中条工場（新潟県胎内市）の工場長、常務取締役などを経て2011年より現職。大事にしている言葉は「凡事徹底」。当たり前のことを疎かにせず徹底してやり続ける大切さを社員に説く。平凡なことを地道に続けていくことが非凡なのであり、それがやがて新たな発想、新たな飛躍につながると考えている。

水澤化学工業株式会社

- 所在地：〒103-0023 東京都中央区日本橋本町一丁目5番9号 KDX日本橋本町ビル
- TEL：03-3270-3821 <http://www.mizusawa-chem.co.jp/>
- 設立：1937年
- 資本金：15億1,900万円
- 売上高：99億5,500万円（2013年3月期）
- 従業員数：347名（契約社員含む）（2013年3月末現在）
- 関連会社：水澤商事株式会社、ミズカ運輸株式会社、黒崎白土工業株式会社、タイ・シリケート・ケミカルズ、サイアム・スタビライザーズ&ケミカルズ



誠実を旨に安全安心な材料を安定的に供給する

私どもが製造しているのは中間原料と呼ばれる無機工業薬品です。表舞台には登場しない製品ですが、石油や油脂の精製剤や樹脂添加剤など、最終製品の製造プロセスには欠かせないものです。

当社はガソリンの精製剤を製造する会社として1937（昭和12）年に設立されました。戦後は、その技術力を糧に様々な研究開発を行ってまいりました。現在は吸着機能材事業、樹脂添加剤事業という2本の柱を中心に多種多様な製品を展開しております。

私が社長に就任したのは2011（平成23）年。そこで改めて感じたのは、いずれのお客様も当社を非常に大事に考えてくださっているということです。長くおつきあいいただいているお客様も多く、年月の中で育まれる信頼感の大きさを痛感します。

しかし一方で、グローバル化する市場競争の中、中国やインドネシアといった豊富な天然資源を持つ大きなライバルが存在することも事実です。コストや量で優位に立つ外国製品をリードするためには、安定的な供給体制と均質で安全性の高い製品づくりが肝要だと考えています。変わらぬ品質の製品を安定的に供給できるという安心感がお客様に選んでいただける理由となるのです。

もちろん、変わらぬ品質といっても、絶えず改良を重ねていますので、50年前の精製剤と現在のものとは内容が違います。より少量で精製できるようになったり、濾過しやすくなったり、と常に工夫を重ねてお客様にとってより使いやすい製品づくりを心がけています。

当社が掲げるモットーは「誠実」「勇気」「行動」です。特に、誠実に仕事をするというスタンスは社員が常に意識し心がけていることで、これこそがお客様の信頼へつながると考えています。そし

て、現状に安住せず、勇気を持って挑戦し、さらに新たな製品づくりを目指し、当社製品を用いた最終製品が世の中の役に立ち、人々の生活を支えるものとなるよう取り組んでいきたいと思えます。

もともと関西資本の当社には近江商人の掲げた「売り手よし」「買い手よし」「世間よし」という「三方よし」の商人哲学が創業当初より根づいており、これも良き伝統と感じています。



大きな可能性を秘める無機素材を徹底して追求

現在当社では、500件以上に及ぶ国内外の特許を取得しています。これは果敢に挑戦してきた結果であり、安定した品質を生み出す技術力とともに、新たなことに挑む研究開発もまた企業体力を高める大きな力となっています。

無機化学工業素材は大きな可能性を秘めています。現在、当社が製造し利用しているのは、無機素材が備える幅広い機能のほんの一部だと言えます。というのも製品の製造過程で、私どもは無機素材の特質にはと気づかされることが間々あるからです。

無機素材の表面特質を活かして吸着剤を開発したように、無機素材のもつ物理的性質や表面化学構造、あるいは触媒の機能をさらに引き出すことができれば、環境改善などの分野での活用が大いに期待できます。吸着剤の細孔やその分布をコントロールし、表面化学構造を自由にコントロールできれば、その活用用途は限りなく広がります。当社では精度の高い分析機器も備えており、無機素材の可能性を掘り下げることで当社の独自性をさらに際立たせることができると考えています。

また、いま世界的な傾向として、高品質、高グレードな素材が求められており、そこに応えていくことも必要です。例えば、当社製

品はフィルムの添加剤（アンチブロッキング剤）に使われていますが、フィルムにはより透明でクリアな品質が求められています。フィルムの透明度を上げるためには、添加剤の組成を微妙に変えたり、添加剤を合成する際、表面状態を変えたりというきめの細かい高度なテクニックが必要です。そうした技術を磨くことも重要だと考えています。

当社は企業規模に比較して技術者数が多く、私が入社した当時もたくさんの技術者の先輩がいました。その中で、無機の素材だけではなく、有機合成を行ったり、シリカミックス（ケイ酸化合物）の研究に携わったりと様々なことを経験しました。経営者となったいま、それが非常に役立っていると感じます。広い視野で物事を見ることが学ばせていただきました。

ただ、技術者のみで新しい技術開発ができるわけではなく、営業部門がどれだけお客様のニーズをつかみきれるかということが大事です。お客様の求めているものを先取りする、世の中の動きを読む、環境問題を考える。そうした知識を持って、最前線で頻繁にお客様と会話することができる営業の存在が不可欠です。この営業力を強化することも今後の課題です。



環境を考え地域社会に信頼される企業を目指す

化学物質を扱う工場や研究施設を持つ企業は、化学物質の扱いや廃棄について細心の注意と万全の対策をもって対応しなければなりません。さらにそうした対策について地域社会に向け適切な情報公開を行い、理解に努めることが肝要です。当社では設立当初より、製造や廃棄のプロセス、環境保全活動に関して地域の方へ直接ご説明する機会をもうけてきました。

1995（平成7）年7月にはレスポンシブル・ケア^{*}の実施を公約し、環境・安全を推進する社内体制を強化しました。レスポンシブル・ケア活動では、地区ごとに地域対話を開催し、講演や工場見学などを行い、行政や住民の方とのコミュニケーションを図っています。特に工場見学は、近隣地域の方や学生を対象に随時実施し、積極的に地域との対話の機会を増やすよう努めています。

さらに環境保全活動の一環として、できるかぎり資源を活かす製造プロセスにも積極的に取り組んでいます。例えば活性白土の製造工程では排酸が出ますが、それをそのまま廃棄するのではなく、そこからさらにアルミを抽出したり、浄水剤となるMICSの素材を抽出したりし、資源を無駄なく使いきるよう努力しています。

これらの活動が実を結び、現在では山形県鶴岡市の水沢工場や、新潟県胎内市の中条工場では、従業員のおよそ8割が地元出身者で構成されるなどしっかりと地域に定着してきました。

ただやみくもに自社の利益だけを考え突き進んでいけばいいという時代ではありませんし、そうした経営スタイルは到底社会には受け入れられません。社外とも社内とも常にコミュニケーションをとり、コンセンサスを得ることが非常に重要なのです。



決して基軸を外れずに絶えず挑戦を続ける

昭和初期、ガソリンの精製剤として活性白土を扱うメーカーは当

社を含め数社ありました。しかし戦後、GHQの指示によりガソリンの精製方法の変更を余儀なくされると、これらの企業は大きなダメージを受けたのです。そうした中、当社は食用油の精製剤に向けた技術開発へ方向転換することでこの局面を乗り切ることができました。時代のニーズやお客様のニーズを見極め、適切に経営へ反映し、勇気を持って決断することの重要性を感じるエピソードです。

当社の基軸はやはり活性白土をベースにした製品展開にあり、経営はこの軸を離れずに技術を積み重ねていくことが大切です。様々に事業展開を図る企業が少なくない時代ですが、当社では堅実に基軸を据えて自分たちの得意技を発展させていくことが企業の発展につながると考えています。

そして同時にこの得意技をどう時代のニーズに活かすことができるか、それを真剣に考察し挑戦していきます。まず現代が必要とするテーマの中でも、環境、リサイクルはその筆頭です。当社では、前述した排酸における有効成分の抽出の他にも、油の再利用を目的とした吸着剤、ゴミ処理時に排出されるダイオキシシンや重金属といった有害物質用の吸着剤などを開発しており、今後もこの分野に力を入れていきます。

市場としては国内、これからも内需を基本に展開します。ただ塩ビ用の安定剤やフィルム用の添加剤などは海外市場で著しい伸びを見せており、製品によっては技術輸出や海外生産も念頭におく必要があると考えています。

常に社員に伝えており、私自身も実行していることですが、「定性的なものを定量的に数値化する」ことが非常に大切です。特性や性質を数値化するためにはデータを整理し、深く掘り下げないとできません。そうすることで論理的に考える習慣が付き、誰にとってもわかりやすい情報にできるのです。

さらに、自分自身の独自の評価基準を持って自らが評価を下すこと、「何故だ？」という疑問を常に持ち挑戦の気概を失うな、ということも言っています。企業経営に安泰ということはありません。実績の上にあぐらをかき、お客様のニーズ、時代のニーズに 대응できなくなれば、たちまち経営は行き詰まります。

守りと攻め、どちらも重要です。歴史と伝統を大切にしながら、常に能動的に新たなエッセンスを加味していく経営のバトンを受け取った私が次へ渡すまでにしっかりと心に刻んでいることです。



情報システム部門の皆様とともに（写真中央が丹呉長之輔氏）

トップは語る こぼれ話はウェブサイトへ

eふぁみり もあわせてご覧ください!
<http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/>



自分で釣った魚をさばくのは当然と仰る澤田社長。最近は神社仏閣めぐりを楽しまれています。

^{*}レスポンシブル・ケア：化学物質を取り扱う事業者が製品のすべてのライフサイクルにおいて、健康・安全・環境に配慮することを経営方針のもとで公約し、自主的に環境安全対策の実行、改善を図っていく活動